様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０６７０

研究課題名（和文）国際協働による英語アクティブラーニングの研究

研究課題名（英文）Study of English active learning by international collaboration

研究代表者
吉田　信介（Yoshida, Shinsuke）

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：５０２３０７４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：アジアにおけるEFLとしての英語を学ぶ大学生が国際チームを組み、ICTを活用して、コンフリクトを解決する国際協働作業を実践することで習得した能力について考察した。その結果、１）アジアにおけるリンガフランカとしての英語力の習得、２）国際コミュニケーションツールとしての情報リテラシー力の獲得、３）コンフリクトのウィンウィン型解決に必要な国際交渉力の涵養を行うことができた。これらの成果をもとに、英語教授法としての「国際協働による英語アクティブラーニング」の実践方法の構築、ならびにその成果としてのグローバル化社会で生きぬくための「学士力」育成に資する多くの貴重な示唆を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：College students learning English as EFL in Asia formed international team and practiced international collaborative work to resolve conflicts utilizing ICT. As a result, 1) they improved English as a Lingua Franca in Asia, 2) they acquired information literacy as an international communication tool, 3) they gained international bargaining power necessary for conflict's win-win type solution. Based on these facts, the researcher could build practical method of "English active learning by international collaboration" as a teaching method of English. As a result of that many valuable suggestions that will contribute to nurturing "bachelor's ability" to live in a globalized society were obtained.

研究分野：英語教育学

キーワード：アクティブラーニング　国際協働　英語教育

１．研究開始当初の背景

グローバルな競争が展開される知識基盤社会の時代を迎え，諸外国と伍していく観点から、若年人口が減少する中で学士レベルの資質・能力を備えた人材の養成を維持・強化していくことは国家の急務である。そこでは、国際的に通用する能力として、複雑な状況の中から何が問われているのかを見抜き、必要な情報を選択して問題解決に必要な文脈を捉える（PISA, OECD, 2003)ことが求められる。また、経済や企業活動のグローバル化に伴って、先進諸国だけではなく、新興国を含めた競争が激化し、各国では優秀な人材の獲得競争が始まり、我が国でも、企業の国際展開を担うグローバル人材の育成が急がれている。

このような社会的状況に鑑み、大学の英語の授業においても「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」への転換が求められており、学生自らがグローバルな視点で課題を発見し、異文化の相手と交渉し、結果を表現できることが求められているが、そのような実践的コミュニケーション能力を通常の教室内の授業で習得させることは容易でない。

そこで筆者は、「国際社会で生きる力を育てる英語教育の研究－ＰＣＭ手法を活用して－」（基盤研究(C)研究期間：2009～2011、課題番号：21520609）において、３年間にわたり、毎年夏期には日本福祉大で行われた World Youth Meeting において、アジアの大学生（王立カンボジア大、フィリピン大、日本福祉大、立命館大他）との協働による国際交流活動を実践し、冬期には台湾高雄市で行われた Asian Student Exchange Program において、アジアの中高大学生による国際交流活動を実践した結果、グローバル社会で通用する、問題解決力、英語コミュニケーション力、国際パートナーシップ、グローバルマインドがある程度養成できることが判明した。

しかしながら、１）リンガフランカとしての英語力については、発音、文法において各国特有の Asian Englishes が使われ、intelligibility の観点からは、多様な英語に多く触れることで高まることが示唆されたのみで、客観的な指標、例えば CEFR におけるどの段階でコミュニケーションを行っているのかについては明らかにされなかった。２）国際コミュニケーションツールとしての情報リテラシーについては、Skype, Facebook, Blog, E-Mail, ML の情報テクノロジーの能力は高まったが、情報リテラシー（情報へのアクセス、批判的評価、情報倫理、図解化・数値化、整列や探索などの基本的なアルゴリズム）については解明されてなかった。３）コンフリクト解決に必要な国際交渉力については、参加学生の言葉から「英語を外国語として使う人同士のコミュニケーションには必ず衝突や不完全な意思の疎通」があるため、「自分たちはこういう風にプレゼンテーションを作りたいと説明する交渉力」や、「自分が主張したいことに説得力を持たせるためのコミュニケーション能力が必要であることに気づく姿」が見られ、リピーターからは「Presenter の経験者として Coordinator がプレゼン内容についてもう少し踏み込んだ意見を与えてあげられれば良かった」との指摘も見受けられた。しかしながら、国際交渉において必ず起きるコンフリクトの解決法については、参加者によるその場限りの対処療法的な手法でしかなく、事前事後の体系的な交渉力指導が必要であるとの課題が残った。

２．研究の目的

（1）リンガフランカとしての英語力

下記の CEFR のコミュニケーション能力指標を用いて、外国語としての英語を学ぶ大学生同士の国際協働作業による問題解決・交渉・プレゼンテーションにはどのレベルの英語力が必要であるか、ならびに、事前・事後ではパートナー校との意思疎通のレベルがどのように変化したかについて明らかにする

① C2 あらゆる話題を理解して、細かい意味の違いも表現できる
② C1 複雑な話題を理解して、明確で論理的な表現ができる
③ B2 社会生活上の幅広い話題を理解して、自然な会話ができる
④ B1 身近な話題を理解して、意思と理由を簡単に表現できる
⑤ A2 日常の基本表現を理解して、簡単なやりとりができる
⑥ A1 日常の簡単な表現を理解して、基本的なやりとりができる
⑦ A0 ごく簡単な表現を聞き取って、名前や年齢を伝えられる

（２）国際コミュニケーションツールとしての情報リテラシー

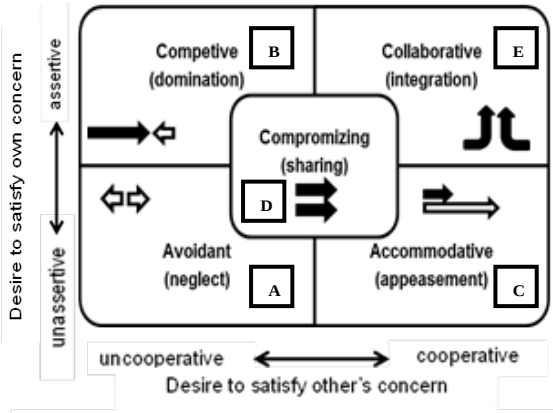
次の情報リテラシーの各項目について、ICT による国際協働作業での問題解決・交渉・プレゼンテーションにはどの項目が重要か、ならびに事前・事後におけるリテラシーの変化を探る。

① 情報へのアクセス力
② 批判的評価力(クリティカルシンキング)
③ 情報倫理力
④ 問題解決での図解・数値化力
⑤ 整列、探索の基本的なアルゴリズム作成力

（３）コンフリクト解決に必要な国際交渉力

国際交渉において必ず起きるコンフリクトの解決について、意見が対立する２者間で、A)回避・B)対決・C)宥和・D)妥協ではなく、ウィンウィンを導く E)協働(Collaboration)の交渉次元を創出する必要がある。そこで次の項目について交渉力ワークショップを開

催し、実践の場での効果を検証する。（下図参照）：
① 交渉の目的の明確化
② 合意事項の確認
③ 情報収集のポイント
④ Bottom Line 設定
⑤ 立場と利害の明確化
⑥ キー項目の明確化と優先化



Five strategies handling conflict (from Thomas, 1992)

３．研究の方法

本研究の目的を達成するため、次の手順に従って研究を進める。

１）準備段階：国際パートナー大学の決定、リンガフランカとしての英語力、情報リテラシー、国際交渉力に関する文献、ならびに先行研究の知見の蓄積。２）導入段階：交流先とのコンタクト開始。パートナー大学生の英語力、情報リテラシー、交渉力についての調査。交流で必要な ICT 設備の設置。３）活動段階：TV 会議での事前活動。現地での国際交渉力ワークショップの開催。対面による国際協働プレゼンテーション大会での発表と記録。４）評価段階：パートナー大学生の英語力、情報リテラシー、交渉力の変化の分析と評価。５）成果の公表：国際協働による英語アクティブラーニングの実践とその効果について、広く関係学会等で発表する。

４．研究成果

（１）H25 年度の成果

前半は，国際交流イベントへの参加準備段階として，国際パートナー大学の決定（中華民国高雄市義守大学）、参加国予定国のリンガフランカとしての英語の諸相の音韻・統語・談話的特徴）の文献調査，情報リテラシー(Facebook，Line，Skype の活用方法の検証）の調査，国際交渉力に関しては，オレンジ問題や W. Ury の一連の著作の精読、ならびに，ビジネスコミュニケーションにおいてしばしば用いられる「交渉方略モデル」をあてはめ、そこで使われる英語コミュニケーションカ、社会言語学的能力、談話力、方略力，レトリックの記述・分析方法についての知見を得た。

後半は、実際に２つの国際交流イベントに参加することで、多くの知見を得た。それらは、１）第 15 回 World Youth Meeting: 平成 25 年 8 月３日～11 日「ステレオタイプを打ち破る」（愛知県知多郡美浜町日本福祉大学），ならびに、２）第 11 回 Asian Student Exchange Program: 平成 25 年 12 月 24 日～29 日「Unsung Heroes」（中華民国義守大学）である。その結果、事前の国内チームでの打合せの結論と、相手国チームの考え方とのすり合わせが困難であったこと、Skype などの遠隔交流では、交渉方法に限界がおこること、現地での対面による打合せで初めて相手の真意がくみ取れたこと、単なる Introduction，Body，Conclusion の分担合作ではお互いのアイデアがちぐはぐになり、結局最初からプレゼンテーション全体のアイデアの再設定をする必要が生じたこと、初期段階でのブレインメトーミングに多くの時間と労力をかけることで、全体の主旨がより明確になること、など多くの知見を得た。これらの成果を、関西大学外国語教育学会での講演で発表した。

（２）H26 年度の成果

1）リンガフランカとしての英語の体感

国際協働プロジェクト参加者には、ａ）英語という言語が参加チーム間(EXPANDIXG CIRCLE：目・中・韓・台・カンボジア）と（OUTER CIRCLE ： インド、フィリピン、マレーシア）で共通語として使われることで、母語話者（INNER CIRCLE）の専有物ではないこと、b) OUTER CIRCLE がすべて英米化しているわけではなく、英語がこれらの国々の文化・伝統・価値観などを表現する手段となっていき、その地域の社会的必要に応じて変化していること、ｃ）この流れは EXPANDIXG CIRCLE へも広がっていることが、交流を通じて改めて確認された。

2）英語を使って実際にできることの意識化

外国語としての英語を学ぶ大学生同士の国際協働作業による問題解決・交渉・プレゼンテーションを行うのに必要な英語力を CEFR (Can-do List)でみた。例えば Speaking では、WYM および ASEP で発表評価基準の「活動や調査研究の内容をわかりやすくまとめて、結論や提言を導くことができる」とされているものとして、熟達レベル「C1:複雑な話題を理解して明確で論理的な表現ができる、および自立使用者［B2:社会生活上の幅広い話題を理解して自然な会話ができる］に相当する。これは、いわゆる国際交流で必要とされる「B1:身近な話題を理解して、意思と理由を簡単に表現できる」とは一線を画するものである。

3）単語概念の内包の違いによる異文化への気づき

日本では、他者と分かち合うことをシェアすることから“share”（共有する）を社会に広めるという意味で用いても伝わらず、

“spread”（広める）で通じさせることができたことがら、議論の大前提となるキーワードが内包する意味が異なると、誤解を生むことに気づいたことは、国際協働プロジェクトならではの成果と言える。

（３）H27 年度の成果

本研究は、これまで１）準備、２）導入、３）活動、４）評価と進めてきた。このうち今回は「英語力／情報リテラシー、交渉力」の３つの研究目的にそった実践に対する４）評価を行った。その結果は以下のとおりである：

１）国際協働作業による問題解決・交渉・プレゼンテーションに必要なリンガフランカとしての英語力のコミュニケーション能力指標(CEFR)は、概ね B2（社会生活上の幅広い話題を理解して、自然な会話ができる）～C1（複雑な話題を理解して、明確で論理的な表現ができる）のレベルが必要であること、国際交流イベントの事前・事後のパートナー校との意思疎通のレベルの自己評価では「変化なし」がおよそ 6 割、向上したものがおよそ４割であることが判明した。

２）国際コミュニケーションツールとしての情報リテラシーについては、（あ）情報へのアクセス力、（い）批判的評価力（クリティカルシンキング）、（う）情報倫理力、（え）問題解決での図解・数値化力、（お）整列、探索の基本的なアルゴリズム（手順）作成力のうち、問題解決・交渉・プレゼンテーションに必要なものは、概ね全てが該当するが、特に（あ）と（い）が必要であること、事前・事後の情報リテラシー自己評価では、（あ）（い）（う）に加えて（え）（お）も習得できたことが判明した。

３）国際交渉において必ず起きるコンフリクトに必要な交渉力については、意見が対立する２者間で、A）回避・B）対決・C）宥和・D）妥協・E）協働の交渉次元が創出されるが、今回行った国際交流イベントでは、ほぼ全員が B、D、H の順、つまり、あるテーマをもとに２つの国際チームが協働で一つの結論を導く交渉プロセスとして、まず意見の対立があり（B:対決）、次にお互いに意見の駆け引きと調整をおこないながら（D:妥協）、最終的にお互いにとってウィンウィンの次元（E:協働）にまで高めていったことが判明した。

（４）H28 年度の成果

本研究は、これまで１）準備、２）導入、３）活動、４）評価と進めてきた。本年度では、前年度から引き続き、英語力と情報リテラシーに対する４）評価を行った。結果は以下のとおりである。

１）国際協働作業による問題解決・交渉・プレゼンテーションに必要なリンガフランカとしての英語力のコミュニケーション能力指標(CEFR)は、概ね B2 レベル（抽象的な議論のできる能力）以上のレベルが必要であること、国際交流イベントの事前・事後のパートナー校との意思疎通のレベルの自己評価では「変化なし」がおよそ 6 割、向上したものがおよそ４割であることを前年度に引き続き確認した。それに加えて、話し手が使う B2 レベルの文法の特性として、分詞構文、主節の主語としての wh-構文、間接話法、It+動詞+不定詞句の使用がみられたこと、プレゼンテーションについても B2 のディスクリプタとして、ある視点に賛成・反対の理由や代替案を挙げて、聴衆の前で流ちょうに発表でき、一連の質問にもある程度流ちょうに対応できること、ならびに、論拠を並べ自分の主張を明確に述べることができることがそれぞれ判明した。

２）国際コミュニケーションツールとしての情報リテラシーについては、a)情報へのアクセス力、b)批判的評価力、c)情報倫理力、d)問題解決での図解・数値化力、e)整列、探索の基本的なアルゴリズム作成力のうち、問題解決・交渉・プレゼンテーションに必要なものは、概ね全てが該当するが、特に a)と b)が必要であること、事前・事後の情報リテラシー自己評価では、a) b) c)に加えて d) と e)も習得できたことが前年度に引き続き判明した。さらに、ICT を駆使したグループ作業において、（１）「課題達成作業（各メンバーの全力をあげてのチーム全体への貢献）と、（２）「社会・情緒的作業（チーム全体としての社会・情緒的結束性の強化）を巧みに使い分けたために、成果をあげたことが判明した。

これらの成果から、英語教授法としての「国際協働による英語アクティブラーニング」の実践方法の構築、ならびにその成果としてのグローバル化社会で生きぬくための「学士力」育成に資する多くの貴重な示唆を得ることができた。

＜参考文献＞

Hoegl, M. & Proserpio, L. (2004), ‘Team Member Proximity and Teamwork in Innovative Projects,’ “Research Policy” 33, no. 8: 1153-1165.

Siebdrat, F. Hoegl, M. & Ernst H. (2009), ‘How to Manage Virtual Teams’, “MIT Sloan Management Review” [http://sloanreview.mit.edu/article/how-to-manage-virtual-teams/] (2017.1.15 入手)

Thomas, K.H. (1992). Conflict and conflict management, Journal of organization behavior, Vol.13, pp.265-274

吉田信介 (2011)「国際交流におけるコンフリクトの解決スキル」『関西大学外国語学部紀要』第 5 号、pp.57-63.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 吉田信介、国際協働プロジェクト ASEP＆WYM の実践と課題、関西大学高等教育研究、査読なし、第８号、2017,pp.103-10.

② 吉田信介、「アジアをめぐる２つの国際協働プロジェクトと英語教育」『学習情報』査読なし、2015 年 3 月号, pp.40-43.

③ Hsieh, L., Yoshida, S., “Kansai-Cheng Shiu University COIL project ～ COIL-Enhanced Pilot Course”～, 査読なし、Proceedings for Global Education Workshop and KU-COIL Conference, 2015, pp.51-54.

〔図書〕（計１件：分担執筆）

① 吉田信介、「国際理解教育の変遷と研究動向・展望」『英語教育学の今』、査読なし、全国英語教育学会編、2014、pp.436 (pp.358-362).

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　信介（YOSHIDA, Shinsuke）

関西大学　外国語学部・教授

研究者番号：50230743